世界の終わりのための序奏

彩宮菜夏

1.

「ジャスティン！　何してるの早く起きなさい、ジャスティン！」

ママの怒鳴り声を聞いてぼくはベッドの上で飛び上がった。毎日一言も違わず同じセリフだ。おかげでぼくは古本屋で買ったニーチェの『権力への意志』を取り落とした。表紙の角が折れ曲がってしまっている。いつの間にかに寝てしまっていたらしかった。本が退屈だったせいだ。頭に手をやると、髪は嵐の中の小麦畑ぐらいの惨状だった。今日も学校でバカにされる。

狭くてきしむ階段を駆け下りて家具と調味料でごちゃごちゃのキッチンへ行くと、パパはむっつりした顔で煙草を吸っていて、ママはぼくの寝坊が原因で今日で世界が終わるかのような猛烈な怒り方をしていた。デイヴィッドお兄ちゃんもジュリアお姉ちゃんも「それみたことか」の顔で黙々とベちゃっついたオートミールを食べている。弟のテリーはベビーベッドの中でお気に入りのお人形をくわえていた。ぼくはテリーを指さして、遠慮がちに言った。

「ママ、テリーが」

「テリーは関係ありません！　また寝坊よジャスティン！　今日で何日連続!?」

十七日連続で今年に入ってからは三十四回目だったけれど、そんなことを口にしたら今度は何が飛んでくるか分からないから言わない。テリーの塩化ヴィニルのおもちゃが大切な弟の身体を悪くする方が心配だったけれど、何度言ってもママは発ガン性物質の危険性を理解してくれない。それだけじゃない。ママは、何も理解してはくれない。ぼくがＩＱ２０３だと分かってから、ますますそれはひどくなった気がする。お兄ちゃんもお姉ちゃんもぼくを冷めた眼で見てくる。パパが無口なのは昔からだ。

正確にはぼくのＩＱはよく分からない。最初に測ったときは１８７だったし、二回目が２０３だった。次測ったらもっと上がるだろう。あんなテストは繰り返して学習すれば誰だって点数を上げられる程度のものだし、そもそも軍が新兵を効率よく雇用するために発案させたつまらない制度に過ぎない。平均値を基準とした偏差値計算の一種でしかないのだから。

その程度のシステムで子どもの頭脳を測ろうという発想が貧困だと思う

し、可能性を絞り込もうとすることは最低だと思う。「君の可能性をもっと高めるのが僕らの目的なんだ」最初に会いに来たＭＩＴの教育学教授が白々しい笑顔でそう言っていた。僕は何も答えなかった。可能性が高いか低いか、そんなもの今現在のアメリカ社会において規定された一時的なものに過ぎないじゃないか。問題は絞り込む、という方なんだ。医者や政治家や大学教授にしかなれず、ホットドッグ屋や露天商や電気工事業になれないのだったら可能性は狭まっているだけのこと。ＭＩＴだのハーヴァードだのの学者から注目を受ければ受けるほど、僕の本来拓けていたはずの可能性は小さくなっていくんだ。中学（ジュニア・ハイ）校に入ったばっかりなのに。それに何より肝心なのは、電気工事業になれない子どもはうちの家業を継げない、ということだった。

ニーチェの非論理性と男性的ロマンティシズムにいまだ拘泥する人間が多いということは、結局西洋中心主義的な価値体系の限界を露呈してるということなのかな、それともこれはぼくがヒスパニック系であることによって導かれた恣意的な結論なのかな、とオートミールをかき混ぜながら考えていると、ママが言った。

「……昨日の夜あのいつものヒゲのナントカ教授から電話があったわ。また来週の土曜日に、ダウンタウンの方へ来てくれないか、だって」

「えー……ぼく、いいよ」

行ったところでオフィスの椅子に座らされて、内容の推測が簡単につく分かりやすい心理テストをドーナツ食べながら受けさせられるだけだ。心理学者の発想のパターンを把握すれば、何を訊きたいのかカードの絵を見ただけで分かる。

するとママは、ジンジャーを丸かじりにしたみたいな表情になって言った。

「アンタが行かないと、ママが罰せられるのよ。あの先生言ってたわ。子どもをヨクアツするケンリが、なんたらかんたら。だから行きなさい。グランド・セントラル駅のいつものところまで迎えに来るって。アンタなら一人で行けるでしょ。お金は向こうが出すって」

そんな法律あるだろうか。ないと思う。でもそれを言うとまたママがキレるから、黙っておくことにした。うちは一応「ニューヨーク郊外の住宅

地」の範囲内だから、行くことはそんなに大変じゃない。サルサソースの匂いがする通り、という呼び名の方が一般的だけど。そうして業務連絡を終えるとママは黙り込んだ。他の三人はとっくに黙っている。朝食の席からうちは葬式みたいだった。そうだ。ぼくがうちの平穏な生活を葬り去ったのだ。

2.

時間になると、押し出されるようにしてぼくはお兄ちゃんお姉ちゃんと一緒に家から飛び出した。スクールバスの乗り場まで走っていく途中、ぼくはふと振り返る。愛すべき小さな我が家。築三十何年とか。白いペンキもほとんどはげている。ぼくが生まれたときに引っ越したらしいけど、「すでに手遅れな感じだった」とお兄ちゃんが何年か前に言っていた。お兄ちゃんが高校生で、まだぼくと仲がよかったころの話だ。今お兄ちゃんは近所のウェンディーズでレタスを切る仕事をしている。

ギリギリのところでバスに飛び乗ると、ぼくは隅っこの席に着いた。バスの中は賑やかだけれど、中学に入って早々のテストであんなことになったものだから、もう誰もぼくの近くには座ってくれない。これでも小学校（グレイド・スクール）では結構モテてたのに。あの頃好きだったシャーリーに「髪は長い方が似合うと思う」と二人きりの時言われて、今でも首筋を隠すくらいに伸ばしたままだ。あの後クラスの男子の半数が髪を伸ばし始めたのはもはや呪われた記憶以外の何ものでもないけれど、未だに何となく惰性で長髪のままにしている。

ポンコツバスの曇った窓から、灰色に曇った空と灰色に塗りつぶされた街並みを見る。懸命に鮮やかそうに見せかけた店や看板が立ち並んでいた。でも、今のぼくには世界の全てが灰色だった。ほんの少し前まではそうじゃなかった。世界は夢と可能性に満ちていた。明日にでも貿易船に無断で飛び乗り、自由の女神に見送られてどこへとも知れない国へ旅立つことも出来た。天才水泳選手としてオリンピック強化チームに史上最年少で入ることも不可能ではなかった。間違ってクラスの女の子とエッチして妊娠させちゃったりすることも、ないことはなかったかも知れない。そして人生

は無限大に変化する。そんなこと起きたって嬉しくも何ともないだろう、と思われるかも知れないが、実現するかどうかが問題ではないのだ。大切なのは、可能性が残されている、ということ。今もしそんなことをしようとすれば、たちまちとっつかまえられて今以上に不自由などこかへ押し込められた挙げ句、そこで一生を終えることになるだろう。まあ、現状だってそう違いはないんだけれど。とにかく、ぼくにありえた無数の可能性は、善意ある教授たちによってきれいに閉ざされた。ピンク色の妄想のヴァリエーションを中学生から奪った罪は重い。

　雲は億劫そうに海の方角へと流れていく。その向こうに何があるか、ぼくは知らない。この世界に何があるのか、ぼくは何も知らない。メキシコ系移民の子どもなのにメキシコにも行ったことがないのだ。かといって、全力で自由の国アメリカにコミットできるほど素直な質(たち)でもない。ぼくらは自由だ！って年中言ってる連中が自由なわけないじゃないか。それにぼくは、少なくとも今、不自由だ。それが重要だった。子どもだから仕方ない、なんて理由はいらない。今、自由じゃなきゃ意味がない。ビルの高層階でオジサンに囲まれて君は天才だ、なんて言われても、全然嬉しくない。幼稚なわがままだってことは充分分かってる。でも今のぼくに必要なのは、こんな周囲の誰にも望まれていないのにやたらくるくるとよく廻る脳ミソなんかその辺に捨てて、どこへともなく旅立つことだった。二百年後の四月一日が何曜日なのか瞬時に分かる計算力も、少数の文例から外国語の文法構造を導き出す能力も、過去に読んだ本のページを一言一句残らず暗記している記憶力も、いらない。そんなものを褒める人がいない、どこか知らない遠い場所へ行きたかった。そんな場所、あるのかどうか知らないけど。

　いつもこんな時思い浮かべるのは、物語の主人公たちだった。彼らはいつも、鳥よりも自由だった。ぼくみたいなしみったれた才能なんかなくても、誰からも褒められなくても、彼らはどこへだって行くことが出来た。自分のやりたいことを、望むやり方で出来た。といっても、かわいそうな子に見せかけて血筋と才能に恵まれたハリー・ポッターなんか大嫌いだった。ぼくが一番好きなのは、そう、ちょうど四年前、友だちの家で開かれたバースディ・パーティでみんなと一緒に見た、ハヤオ・ミヤザキの「キ

ヤッスル・イン・ザ・スカイ」だった。

最高だった！　映画なんか観るとどうでもいいことばっかり考えて頭がいっぱいになるぼくが、頭の中空っぽで身じろぎもせずにずっと観ていた。ポップコーンを一口も食べなかった。パズーとシータは、自分の手で道を造り出し、自分の脚で世界を歩んでいた。他のアメリカ製のアニメ映画は結論がオトナとコドモのココロのフレアイ、みたいのにたどり着くのがほとんどで反吐が出る感じだったけど（あの押しつけがましい政治臭さ！）、あの映画は違ったのだ。大人たちは救いがたい愚か者で、子どもは何でもすることが出来た。最後のシーン、フラッピターに乗った二人が行く先も分からないまま空の向こうに消えていく姿を見たとき、ぼくはこの上なく幸せになった。そうでなくちゃいけないんだ。最後に親方や家族の元に帰るんじゃない。物語はそこから、これから始まるのだ。ぼくは両手を上げて叫んだ。周りの他の子たちが妙に冷めているのも気にならないくらいだった（彼らはカッコイイモンスターもスーパーヒーローも出て来なかったから気に入らなかったらしい）。その年の誕生日に、ぼくはママにねだってヴィデオを買ってもらった。飽きることなく何度も観た。普段哲学書や長大な古典文学（ディケンズなんかはいいと思った）しか読まないぼくが珍しく子どもらしい素振りをみせたので、ママはたいそうご機嫌だった。しかし、そんなことも気にならないほどぼくは物語に熱中した。世界は七色に輝いていた。そして物語が終わった瞬間、ぼくは現実という落とし穴に突き落とされた。この穴は深かった。穴の向こうには無限に広がる世界が見えているというのに、抜け出す手段はどこにも見当たらなかった。フラッピターを作って穴から飛び立てないものかと綿密に図面まで引いて当時のぼくは検討したけれど、現在の技術力ではあのサイズの物体を羽ばたきで飛ばすのはどう考えても不可能だった（たぶんあの世界では空気の粘性が異なるのだと思う）。とにかくあの映画でぼくは穴の向こうへの夢と、若干の航空・流体力学の知識を得た。この現実が穴だ、ということが分かっただけでも大した収穫だった。きっと、この世界は途方もなく大きな穴に囚われているのだ。丸ごと、全部。ちょうどアインシュタインが思い描いた巨大な質量によって曲げられる時空間の図のように。そしてその穴から抜け出したとき、初めて世界は始まるのだ。今までの世界の全ては、ほ

んの序奏に過ぎない。ビギニング・オブ・ザ・ワールド。
バスが爆発するような音を立てて停車した。舌を噛みそうになる。あの映画以来ニホンに興味を持って、でも何の本を読んだらいいか分からなかったからダイセツ・スズキのゼンの本を何冊か読んだ。そのせいでニーチェが浅薄に感じられたのかも知れない。確か彼も東洋思想に影響を受けていたはずだ……と考えながら席を立った瞬間、後ろから駆けてきたステファンにノートで後頭部をはたかれた。ぼくは前につんのめる。
「バカになっちまえ！」
ステフは叫んで、他の男の子たちと肩を組みながらゲラゲラ笑ってバスから飛び出していった。おかげでありがとうを言いそびれた。バカになる？
望むところだ。ナップザックを背負い、口をひん曲げてぼくはバスの昇降口に立つ。すると背後から声を掛けられた。
「頑張れよ」
振り返るといつもの運転手のおじさんだった。三十代、おっとりした目付き。
「楽しもうと思や、何だって楽しめるさ」
ハンドルにもたれたおじさんは、いかにも人のよさそうな笑みを浮かべて言った。ぼくは頷いた。忠告の内容よりも、おじさんの声を聴けたことの方が嬉しかった。忠告ってそういうものだと思う。内容よりも、誰が言うかの方が肝心だ。おじさんは手を振った。ぼくは笑顔で手を振り返し、そして後ろから来たリカルドに突き飛ばされてバスの外に出た。そのままけつまずいて、ドサリと地面に倒れ込む。外の空気は今日も窒素化合物や硫黄化合物やケチャップや化学調味料が入り混じった奇怪な臭いを漂わせていた。レイチェル・カーソンの忠告は結局誰も聞きやしなかった。つまり、誰が言うかよりもさらに肝心なのは、誰に言うか、ということなのだろう。
ぼくはゆっくり起き上がると身体から砂を払い、ポケットからメガネを取り出して掛けた。遠視気味なのだ。細かいかすり傷の付いたレンズの向こうには、ススで汚れた中学校の校舎が見えた。今日もどす黒い怨嗟の炎と絶望の金切り声を上げて、地獄の学舎は佇んでいる。ＭＩＴの教授にも言ってやればよかった。あなたたちがどれだけ熱を上げて教育学を研究し

ても、そんなものどこにも還元されてやいませんよ、って。学校制度は百年前から根を生やしたように微動だにせず、四十年近く前にスキンヘッドの素敵なゲイのフランス人が考えたことすら、関係者の間ではろくすっぽ共有されていないのだから。

そう。世界はまるで先に進んでいない。無数に有り得た可能性を片っ端から鉄球を振り回して潰しながら、人間は世界を穴ぐらの中へ閉じこめようと眼を血走らせているのだ。そして今少しずつ、最後の最後の可能性が閉ざされようとしている。閉塞、あるいは終焉。毎日学校でウェブのニュースを見ていると、そんな気がする。外から飛び込んでくる目映い光が、静かに絶たれようとしている。そうして、人間は昼も夜もない庇護の下の安息と永遠の生命を得るのだろう。つまり、胎児への回帰。そんな気がしてならないのだ。

つまらないことを思いながら、うつむいたぼくは中学校の門をくぐった。

3.

五日後、ぼくは無事マンハッタンのグランド・セントラル駅の人混みの中にぽつねんと立っていた。Tシャツの上にだぼだぼのお下がりの上着。それにジーンズのパンツ。駅の中では数えきれないほどの人たちが肩が触れるくらいの間近ですれ違っていて、それでいながらみんな、誰よりも孤独だった。あと、この街もまた変な臭いがした。間違っても深呼吸なんかしない、大量の人と物から発せられる、含有物不定のカオティックな臭い。立ってるだけで酸欠になりそうだった。

ぼくは周囲を見廻した。一応昨日も確認のために教授から電話があったみたいだけれど、情報は全部ママ経由だから判然としない。初期情報の８５％くらいは失われている。でも、ぼくが直接電話を取ることはママは許せないみたいだった。無理もないと思う。

こんな事ばかり言っているとまるでぼくがママのことを嫌っている、あるいは疎んじているように聞こえるかも知れない。誤解されたくないけれど、ぼくはママのことを愛している。うんざりするほどアメリカ的な言い回しだと分かってはいるけれど、それでも愛している。ママだけじゃない。

毎日石のように黙ってよその家のテレビを直してるパパのことも、ハンバーガーショップで適当に野菜をざく切りにしているお兄ちゃんのことも、二ヶ月ごとに彼氏を取り替えては泣いたり笑ったりを繰り返しているお姉ちゃんのことも、三十年後のガンの可能性を顧みず果敢に指人形を口に入れるかわいい弟のことも、みんな心から、愛している。そればかりか、ぼくはきっとこの世界の全てを愛している。だからこそ、世界からの冷たい仕打ちにうめき、絶望し、それでも辛うじて生き延びているのだろう。

約束の待ち合わせの柱の前まで、騒音の中を押し合いへし合いしながらなんとかぼくは到着した。筋力でも付けるかな、と自分の細い腕を撫でながら、ちょっとだけ思った。それから、肩掛けバッグの中から『資本論』第一巻の恐ろしく分厚いペイパーバックを取りだした。千ページを超える本を読むという至福を味わうためだけに買ってきた本だ。表紙を開く前にふと、背後の柱に掲げられた化粧品の広告を見た。フルカラーで高級紙に印刷された半裸のモデルが、セクシーなシャドウを塗った眼差しで駅を行き交う無関心な人々を見つめ、何かを言いかけたようにぽってりとした唇を半開きにしていた。ぼくは嘆息して、前に向き直った。すると、目の前に髭を生やしたおじさんが立っていた。

ぼくは訝かしんだ。髭とはいってもあの教授とはまるで違う。長い髪も髭も真っ黒だった。肌も浅黒く（ぼくもだけど）、黒縁眼鏡の奥の小さな眼も黒い。アジア人のようだ。服装はといえば垢染みたジャンパーにすり切れた穴だらけのジーパン。多分違うだろうと思ったけれど、念のためぼくは尋ねた。

「……ＭＩＴの人ですか？」

するとおじさんは、意外なほど深く落着いた声に流暢な発音でこう応えた。

「同じようなものだ」

「本当は？」

「ホームレス」

面白くもなさそうにおじさんは言った。いや、おじさんだと思ったけれど、もしかすると若いのかも知れない。アジア系の年齢はよく分からない。何となくぼくは訊いた。

「ひょっとして、日本人？」
「ご明察」
簡単に彼は応える。眼をほんの少し見開いて、多少は驚いたようだった。中国人と日本人と韓国人の区別は普通付かない。ぼくだって勘で言っただけだ。ぼくは続けた。
「お金なら、ありませんけど」
「マルクスを抱えている少年に金をせびるほど、私は無粋ではないさ」
彼は即座にそう返した。かなり頭は切れるようだった。彼はその小さな目をわずかに細めた。ぼくはじっと彼を見上げる。けれど、会話はそこできれいに途絶えてしまった。彼は何も言わない。ぼくも言うべき事は何もない。無数に折り重なる雑踏の機械的な靴音に取り囲まれて、ぼくらは永遠にここへ見捨てられたかのように思えた。
「……君は、分かっているのか？ 自分が重大な岐路に立っているということに」
ホームレスのおじさんは、ゆっくりと口を開いた。ぼくは首を傾げた。
「岐路？」
「そうだ。人生には常に無限に分岐点が存在する。人は無意識のうちにそれを選択し続ける。当然ながら分岐には大きなものも小さなものも存在する。一杯のコーヒーを逃すような選択もあれば、世界を破滅へ追い込む選択も、一個人の人生の中に存在し得る」
「今ぼくは、人を待ってるだけですけど」
「それは社会的に定義されただけの局所的意義だ。選択そのものの総体的性質には関係ない」
彼は両の手をポケットに突っ込んだままそう切り返した。それは確かにその通り。しかしぼくたちは、バタフライ・エフェクトの話をしているのか？ そもそも彼は何者だ？ ＮＹのホームレスくらいになるとみんなディオゲネスになれるのだろうか。彼は話を続ける。
「そして多くの場合、我々は選択に失敗する。選択の価値に気づくことが出来ず、無用な分岐に足を踏み入れ、時間を浪費し続ける。時間とは即ち選択の蓄積のことだ。また天才というのは要するに、選択に成功し続ける人間のことなのだ。分かるか？」

ぼくは苦笑をこらえきれなかった。だとすればぼくは、天才でも何でもない。可能な限り全ての選択にしくじり続けて、いつの間にやら泥沼に胸まで浸かっているのだから。当たり前だ。ぼくが評価されているのは今現在の時代のアメリカ社会において要求される類のスキルを、たまさか子どものくせに他人よりも過度に持ちすぎているために他ならない。そんなものが天才のわけがない。結果と原因の取り違え。単にちょっとばかり見た目のよいベアリングを拾って、彼らは喜んでいるだけのことだ。

そうしてそこまで考えたとき、ぼくはハッとした。もしかすると彼はまさしく、世界の可能性のことを話しているのではないか？　選択とは、存在している可能性を一つに決定していくことだ。それならば、ぼくがずっと考えていた問題と、彼の語りは直結している。無数に有り得た可能性を愚かしい選択によって台無しにし、世界を終焉へと追い込む人間たち。彼はぼくを、その底知れない瞳でじっと見ていた。自分の頭が高速で回転し始めるのをぼくは感じる。どうやら、彼は適当にあしらってよい種類の人間ではない。ぼくは慎重に、こう問うた。

「……この世界に有り得たはずの可能性についても、同じことが言えるということ？」

「その通り。正確に言えば個々の人間に与えられた選択可能性とは、世界総体の選択可能性の一部ということになる。世界と個人を分断することが既に誤謬なのだ。我々の選択が世界を決定していく。一つの例外もない。無限人による無限回の決定によって時間、即ち歴史は構築されている。この場合、サモアの一人の少女とナポレオンの間に優劣の差はない」

彼は淡々と述べた。不思議なくらい無表情だった。アジア人だから表情が掴めないのだろうか？　違うだろう。ぼくはもうすっかり真剣になっていた。

「でも、可能性というのは次第に減少していくものではないの？　これは情報量のエントロピーの問題だよ」

「まあ、そうだ。共産主義の例を出すまでもなく、大半の選択は不可逆的だ。やり直しは効かない。だからこそ選択なのだ。どんなに素晴らしいスウィッチが目の前に用意されても、与えられた人間がそれを破壊すれば元も子もない」

ぼくは背中のポスターが気になって、『資本論』をバッグの中に戻した。彼は続けた。

「大切なのは結局、選択するのは誰か、という問題なのだ。確かに、残されている大きな可能性は少ないかも知れない。大半の分岐点は破壊し尽くされて、今この時代に生まれこれからを生きる君たちには残り滓のような世界しか存在しないのかも知れない。だとしてもこの世界が厳然と存在し、君たちが生きている限り、人生には無数の分岐点が用意されている。ならば同時に、この世界にも選択肢が存在し、可能性が残されているということなのだ」

ぼくは彼の言葉を確かに理解した。一点の曇りもない明晰な論だった。彼の言っていることは間違いなく正しい。しかし現実に適用するには、一つだけ弱点がある。可能性の大小をぼくたちは判別できないということだ。目の前の道を右へ行くか左へ行くか、それによってどのような結果が生じるのか、彼の論旨に従えばぼくらは予見することが出来ない。だったら、これからもこれまでと同じようにぼくらは選択に失敗し続けるだけのことだ。これは机上の空論なのだ。

そうやってぼくが問題点を指摘しようとすると、突然彼はぐっと顔を近づけてきた。首を前へ突き出すようにして、ほとんどキスの距離までそのヒゲ面を接近させる。ぼくは息を呑んだ。

「例えば、こんな選択が在る」

彼は聞こえるか聞こえないかというくらいの小さな声でそう言った。眼は見開き、ぼくを強く捉えている。ぼくは動くことも出来ずに、つい視線をよそへ逸らせた。彼はポケットから手を引き抜くと、その長く節くれ立った指をピンと立てた。

「一つ。このままのうのうと駅構内でぼうと突っ立って待ち、ＭＩＴの抜け作どもに取り囲まれてオモチャにされる。彼らの権威欲と自己満足のために君の貴重な時間は浪費される。これは確実な話。世界は今までのまま何も変わらず、地獄のような閉塞感が太陽を覆い隠して全てはフェイドアウトしていく」

耳元で囁くように彼は言った。ぼくはじっとその意味について考えていた。

「二つ。私と共に行く。私が何者か君は分からない。知っているのは日本人だということだけ。どこへ連れて行かれるか、何が起こるか、君には何も予測が付かない。もしかしたら私は少年を愛好する変態性欲者で、君はレイプされるかも知れない。この街ではありがちな話だ。しかしそこには確定的でない可能性が残されている。君はそこに賭けることが出来る。それだけでもこの話には価値がある。そしてさらに、世界は君の選択によって変わる」

「……変わる？」

「さっき話したとおり。君の選択は即ち世界の選択だ。君の選択によって世界が突破（ブレイク・アウト）し、無数の可能性に向けて拓ける、かも知れない。世界はそこから始まる、かも知れない。その可能性を否定することは、誰にも出来ない。分かるか？　一対一の判断に際して確率は意味を成さない。選ぶか、選ばないか。二つに一つ。それは、君が決めることだ」

――さあ、どうする？

彼は最後にそう囁いた。ぼくは動くことが出来ない。周囲の人々はぼくらが見えないかのようにどこかからやって来て、どこかへと去っていく。彼らには顔がなく、声もなかった。彼らもまさに今、選択を続けているのか？　失敗を続けているのか？　例えばぼくらに気づかないことによって？　そしてそんな失敗の群に蟻のように集られ蝕まれて世界は瓦解の一歩手前まで追い込まれているのか？　考え得ることだ。それに対して、ぼくは何をすることが出来る？　どう生きることが出来る？　問いかけが頭を渦巻き、ぼくは身動きが取れない。

バカらしい問いかけかも知れない。その通り、ぼくはベアリングの一つに過ぎない。しかしそれは、絶望すべきことなのか？　ベアリングの一つだとすれば、すでに逃げるという選択肢はないのだ。文脈から抜け出すことは誰にも出来ない。その時、ぼくに何が出来る？

さあ、どうする？

「やあ、ジャスティン」

右方向から緊張感のかけらもない声が聞こえた。ぼくは現実へ戻ってきた。ホームレスの男はフンと鼻息を洩らすと、早口にこう言った。

「次に逢うときが最後のチャンスだ。逃した選択は帰ってこない」

身を翻し、男は去っていった。彼の背中は人混みの中にたちまち紛れ、消えてしまった。ぼくはもうそこにはない彼の身体を静かに見つめ、動かずにいた。ＭＩＴのヒゲの教授は貼り付けたような画一的な動きで頭をかき、それから心配そうに聞こえる声で尋ねた。

「いやあ遅れて済まなかった……ところで、今の男は？」

「トルコ語でどこかの民謡をつぶやいていました。結構面白かったな」

「そうか、危ないところだったね。気を付けたほうがいい。この街には、頭のおかしい輩も大勢いる。君に悪影響を及ぼすよ。本当はお母さんに送ってもらった方がいいんだけど。今日はね、実は君にとっていいニュースを聞かせられそうなんだ……さあ、行こうか」

そう言って彼はぼくに手を差し出した。彼は決して、ぼくの手を自分から握ろうとしない。彼はそれをぼくに対する一種の敬意のようによそおっている。彼自身そう思っているかも知れない。けれどぼくはそこに、彼のぬぐいがたい人種差別意識を読み取る。そう、提示されるメッセージの形式はすべからく固定的だ。それをいかにして読み取るか、誰が読み取るか。結局のところ、全てはそこにかかっているのだ。ぼくは教授の手を強く握った。彼は少しだけ驚いた顔をした。それから、ぼくらは歩き出した。

4.

明くる日曜日になってもぼくの気は晴れなかった。朝から頭にもやがかかったような感じだった。久しぶりに寝坊しなかったからママは少しだけご機嫌だったけど、ぼくは釈然としない気持ちのままでいた。何をしていてもぼくの眼はここではない別の場所を見ていて、ぼくの身体はここではない別の場所にあった。ぼくは囚われていた。あるいはぼく以外の全てが何かに囚われていた。集合的にはそれで正しい。

頭の大半はこの非言語的でカオティックな考えの中に突っ込まれていたので、何を訊かれても頭の残りの部分で処理的に応えてしまう。いつの間にか昼食を食べ終わり、ぼくは膝を抱えて、ソファの上にいた。ママが昨日は何を話したの？と尋ねた。ママがあのセッションに関心をもつなんて珍しいなと思った。ぼくは、来週のセッションで天才児向けの国立特別教

育校の説明を受けることになったんだ、と応えた。その後も、夢うつつのままでしばらくぼくは返事をしていた。それからふらふらと玄関へ向かうと靴を履き、外へ出た。

「あら、じゃあその学校が、いいお誕生日プレゼントになるわね」

ドアが閉まる間際に、追いかけるようにしてそんなママの声が聞こえた。誕生日？　一瞬考えて、ようやく思い出した。来週の土曜日は、ぼくの記念すべき十三歳の誕生日だった。

近所の通りを独りで歩きながら、ぼくは昨日あった出来事についてずっと考えていた。あの男が何者かなんてそんなの分かるはずもない。たぶん彼の言っていたとおり、ただのホームレスなのだろう。可能世界論に多少造詣が深い。問題はそんなことではなかった。可能性に向かって拓けた世界？　それって、一体どんなものなのだろうか。ぼくにはさっぱりイメージすることが出来なかった。この世界に残された可能性？　何だろう。

顔を上げて目の前の通りの様子を見てみると、いつものように雑然としていた。ボロいトラックががたがたと揺れながら走っていき、途方もなく大きな声で笑い合っている露出過多なお姉さんたちがいた。雑貨屋のおじさんはお客の相手もろくにせず、テレビでフットボールの試合を見て昼間からビールを飲んでいる。集合住宅の脇を通り過ぎると、三階の窓からどこかのおばさんの血管が千切れそうな怒鳴り声が響いてきてぼくは縮み上がった。どこもかしこも奇跡的なまでにいつものままだった。ぼくにとっての世界は実のところこんなところで完結していて、それ以上もそれ以下も想像できなかった。あの男との議論みたいなものは何時間だって続けられるけど、それは論理の上のことに過ぎない。いざ世界の可能性について現実に思い浮かべてみろ、と言われても、何も出て来なかった。

歴史を勉強すると昔の人たちは、世界を変えようと本気で立ち向かい、命を賭し、そして死んでいっている。ぼくにはそれが、ずっと不思議に思えてならなかった。その頃の彼らは間違いなく、世界の可能性に夢を見ることが出来た。強く、本気で。そこには命を賭けるだけの価値があった。今、ぼくらにそんなことは思いも寄らない。世界を変えようとする奴なんか、どこにもいやしない。必要がないのだから仕方ない。世界中を見廻したって、そもそもそんなものを求めている奴がどこにもいないのだ。

そうだ。昨日の問題にしても、きっと結局のところそこへ行き着く。今、ぼくは何をすべきか。いかにして生きるべきか。何もすべきでない。どのようにしても生きるべきでない。少なくとも、生きるという言葉に動的な意味が含まれている限りにおいては。それが結論だ。今の世界は過去の記憶にひたすら固執し、無限回の再生産を望んでイモムシのようにもがいている。そんな世界で、果たしてどんな生き方があるというのだろう。床に置かれた時計のように、ただ淡々と在り続けて時を刻む。それしかぼくらに生きる道はない。それを生と呼ぶのか、ぼくにはすこぶる疑問だ。だからぼくらには、生きる道などない。どこにも、欠片も、ない。だからぼくには、可能性に向かって拓けた世界など、想像することすら叶わない。つまるところ、そういうことなのだ。

世界はすでに終焉へ向けて秒読みを始めている。

抗うすべはない。

ぼくはゆっくりと、息をついた。

「ジャスティン！」

突然呼びかけられて、ぼくは眼を見開いた。足元を見ると、小さくて白いものがまとわりついていた。彼女はケチャップのついた口でニッコリと笑った。近所に住む、五歳の女の子のリズだった。この辺りにしては珍しく白人の子で、くるくるしたきれいな金髪だった。今日もウサギのぬいぐるみを手にしている。幸福というものを象徴するとちょうどこんな姿になるんじゃないかな、という具合だった。

「なにしてるの？」

彼女は舌足らずに尋ねた。世界が終焉を迎えるという結論が出たよ、と伝えるのもどうかと思ったので、散歩、と簡単に応えた。するとリズは、またニーッと笑った。

「ごいっしょしてもいい？」

もちろん、とぼくは紳士的にうなずいた。ぼくの知る限り、ここら一帯で最も上品なレディが彼女だった。

ぼくらは手をつなぎ、昼下がりの通りをワルツのリズムで歩いた。そうしてぼくは、彼女の話に耳を傾ける。リズはどんなことでも一生懸命に話してくれる。だからぼくも、要所要所で相づちを打ち、きちんと聞く。誠

意を込めてくれる相手には、こちらも必ず誠意で応えるべきなのだ。それに、彼女の意見はいつも大体愉快だった。

そのまましばらく歩いていると、ぼくらは交差点に突き当たった。どこへ行く当てもなかったので、リズにどっちへ行く?と訊いてみた。リズは、さっきから引きずっていたウサギのぬいぐるみに顔を寄せて、何事か相談している様子だった。それから、ひだり、と応えた。その先も、曲がり角へ来る度に、みぎ、ひだり、まっすぐ、とウサギの彼は適切な判断を下してくれるようだった。ぼくにもそんな素敵な賢者がいてくれればな、と少しだけ思った。

ふと訊いてみたくなって、ぼくはリズに尋ねた。

「リズは将来、何になりたい？」

「しょうらいって？」

「あーええと、大人になったら」

ホントにそうなのかな、と首を傾げながら、ぼくは応えた。リズは言った。

「あのね、ママがね、およめさんにはなっちゃダメだってゆってた」

確か、この子の家は母子家庭だった。もちろんぼくが口を挟む筋合いじゃないけれど、でももうちょっと何かこう、あるだろう、と思わずにはいられない。非論理的な話だけど。その母親の言葉がいつの日か彼女の桎梏にならないことをひそかに願いつつ、さらにぼくは問うた。

「リズがなりたいものはないの？」

「なんでもいいの」

するとリズはすぐにそう言った。なんでもいい？

「あのね、ほんやさんとね、けーきやさんとね、おはなやさんがあったの。でもぜんぶおもしろそうだから、なんでもいいの」

彼女はそう説明してくれた。なるほど。至極納得のいく考え方だった。

「ジャスティンは？」

今度はそう問い返された。そして案の定、ぼくは応えに窮した。

なりたいものなんて小さい頃からずっと、何もなかった。どちらかといえば、なりたくないものを挙げた方が早かった。教師、弁護士、医者、政治家。いくらでも出てくる。でも、なりたいものはなあに、と大人に尋ね

られても、ぼくはうつむくばかりだった。普段はどんなことでもいくらでも考えることが出来る頭が、この時ばかりはストップしたまま、何も思いついてはくれなかった。そして大人たちはそんなぼくを見ると、いつだって苦笑して、きっとすぐに夢は見つかるよ、と訳知り顔で言って、頭を撫で、そうしてどこかへ行ってしまうのだ。必ず。

なりたいものなんて、何もないのに。

「ジャスティンは、なんにもならなくていいのよ」

ふいにリズは、歌のように軽やかな調子で、楽しげに言った。

「ジャスティンは、もうステキよ」

ぼくはきょとんとした。リズはぼくの顔を見上げ、得意げにふふんと笑った。

その後は二人して、近所の小さな公園で遊んだ。ベンチに座ってまたお話をし、そうしているうちに日が陰ってきたので、ぼくらは帰ることにした。とても、よい一日だった。

行きに通った道を、ぼくはリズと一緒に歩いた。夕陽はゆっくりと傾き始めていて、道には紅く縁取られた影が二つ、長く伸びていた。思い出のような時間が過ぎていった。その間も彼女はずっと、ウサギのぬいぐるみを大事そうに引きずって歩いていた。

彼女の家の前まで連れてきてあげると、別れ際にぼくは、そのぬいぐるみを指して言った。

「その子さ」

「ランディ？」

リズは左手のぬいぐるみを持ち上げる。ウサギのランディはなすすべもなく、世界タイトル戦を終えたチャンピオンのように彼女の手にぶら下がっていた。ぼくは笑って言った。

「彼、道に詳しいんだね。行きに、ずっと教えてくれてたから」

すると彼女は、ううん、と首を振った。

「あのときは、ジャスティンがいってたこと、おしえてあげてただけよ。ランディはうんうんっていってただけ。みちをきめてたのは、わたし」

そう言うと、身体を翻してリズは家の玄関へと駆けていった。

虚を突かれたぼくは、夕方の道に一人取り残された。

ポケットに手を突っ込んで、ぼくは下を向きながら家に帰った。なんだか何も考える気が起きなかった。ぼくの家の散らかった玄関先には、鳩が数羽集まって、地面に散らばった何かを熱心に食べていた。ぼくが近づいていっても飛び立とうとすらせず、いそいそと横に逃げていってはまた一生懸命ついばんでいた。ぼくは黙ったまま、重いドアを開けた。

5.

そして、次の土曜日がやってきた。

世界には何の変化もなく、粛々と時は経ち、ぼくは再びあのきらびやかなグランド・セントラル駅の柱の前で、例の教授を待っていた。いつになく構内に人は多くて、まだ六月だというのにいやに暑苦しかった。ぼくは今日は本も持たずに、柱にもたれて人の影を眺めながら、ものを考えていた。天井のシャンデリアがまぶしかった。

今日ぼくは、全米から集められた天才児ばかりが通う、特別校の説明を受ける。クリーヴランドにあって、仲間たちと寮で生活するらしい。どんな教育が行われているか、どんな子たちがいるか、そこへ行くことが将来どれだけ有益に働くか。そういう話を聞く。ぼくにとっても、いい話なんだろうなとは思う。今行っている普通の公立中学校よりも、きっとずっと気が楽で、楽しいだろう。膨れあがった嫉妬、理不尽な怒りでいじめられることも、きっとなくなる。思う存分、のびのびと暮らすことが出来る。たぶん、何事もなければこのまま、そこへ通うことになるのだろう。これから、幸福な人生が始まるのかも知れない。

けれど何となく、僕はまだそれをすなおに受け入れることが出来ていなかった。大した反抗心ではなかった。ここ一週間ほどの思索の結果、どうやらぼくには（そして世界には）それほど壮大な可能性は残されていないということがはっきりした。これは明白な事実だ。すでに済んでしまった選択を今さら取り戻すことは出来ない。それに対する抵抗は、限りなく不可能に近い。そして、可能性のない場所に夢を見ることは出来ない。

それなら時間を有効に使うためにも、この終わりつつある世界の中で、少しでも心地よく生きることの出来る場所に身を置いたほうがいい。

安逸なる休息の生（レスト・イン・ピース）。それがこの世の趨勢だ。そんなことはぼくだって、よく分かっている。この選択がぼくにとって（そして世界にとって）正しい。仮に教授たちの思惑の中へ飛び込むことになるのだとしても、それは決して恥ずべきことじゃない。理屈ではそう分かっているのだけれど。最後の最後、一番底の辺りにほんのちょっとしたしこりが残っている。それだけのことだった。

本当にそれでよいのだろうか？

どこまでも直観的、感情的な疑問だった。理由はない。ぼくにしては珍しいことだった。そんなことでいいのか。理屈じゃないから答えは出ない。ただただ漠然とした、気分の問題だった。それは一種の哀感に似ていた。まるで人が息を引き取る瞬間を見ているような気がした。少しだけ悔しさも混じっていた。ぼくは（そして世界は）、逃げているんじゃないか？

たとえはっきりと見えないとしても、これっぽっちも想像できないとしても、拓かれるかも知れない可能性に賭けるべきじゃないのか？

――それは、君が決めることだ。

あの男の言葉を思い出した。

ぼくはふぅ、と息をついて、まぶたの上から眼を押さえた。それから、パズーのことを思った。あの優しい歌の旋律が、胸の内によみがえった。パズーにあって、ぼくにないものとは何なのだろう？　パズーに出来て、ぼくに出来ないことって何なのだろう？　そんなことばかり考えていた。そんな、十三歳の誕生日だった。

「や。ジャスティン。待たせたね」

いつもの声が聞こえた。教授は今日もいつもと同じカジュアルな服装で、親しみやすさを装っている。でも実は、駅の手あかのついた手摺りに手が触れる度に、彼が除菌したハンカチで慎重に手を拭っていることをぼくは知っている。彼はぼくに、手を差し伸べた。

「さあ。行こうか」

ぼくは彼の手を握りかけた。

その時、視界の隅を、あの男が横切っていった。

ぼくは息を呑んだ。黒の長髪、伸び放題のヒゲ、汚れた服、黒縁のメガネ、そして、深く鋭い眼。間違いなく、あの日本人のホームレスだった。彼はあたかもどうでもよい群集の一人であるかのように、駅を行き交う人々の中に紛れ込んでいた。足早に駅の奥、地下へ向かう階段へと立ち去ろうとしている。普段なら決して気づかないような、一瞬のすれ違いだった。

――次に逢うときが最後のチャンスだ。

また、あの男の言葉が耳の奥に響いた。

その瞬間、周囲の雑踏の音が全て断ち切られ、ぼくは自分の思考の中に入り込んでいた。

これが最後の選択なのだろうか。逃した選択は帰ってこない。彼はそうも言っていた。分岐点は常に一度きりしか通ることが出来ない。取り返しはつかない。今、目の前にはぼくの前途を祝福せんとする立派な人物の手が伸ばされている。他方で、正体の知れないホームレスの男がぼくのそばを通り過ぎようとしている。本来なら迷う余地などどこにもない選択だ。この駅にいる人千人に訊いて全員が同じ答えを返すだろう。しかし。

しかし、だからこそ世界は閉塞しつつあるんじゃないか？　だからこそ世界は、終わりつつあるんじゃないか？　選択の集積が時間であり人生であり歴史であるならば、その結果として終末の現在があるならば、たった一人の感覚に拠った不条理で愚かしい決断が、やがてこの世界を大きく変えるのではないか？

そうして世界はこれから、始まるんじゃないか？

混沌と懐疑の中に跳躍し加速するぼくの思考は、次第に一点へと凝集していく。最後に残ったのはこの上なく単純で、そして暖かな、小さく幼い言葉だった。

――道を決めるのは、ぼくだ。

ぼくは教授の手を払うと、背を向けてホームレスの方へと駆け出した。

「お、おいジャスティ……」

慌てふためく彼の声は、ぼくの背後で人混みの中についえていった。ぼくは、階段を下って今にも去ろうとする男に必死で追いつこうと、全力で走った。人と人の間をかき分け、ぶつかりながら、男の小さな背を追った。そうして、なんとか、ぼくは彼に追いついた。

ぼくがすぐそばで息を切らしてあえいでいると、男はふと振り返り、ぼくの姿を見た。彼とまっすぐに眼が合った。男には、今日も表情がなかった。ぼくは、何も言えなかった。

もうどこへ連れて行かれようと、かまわなかった。

その真っ黒な瞳でぼくを捉えると、彼は前置きもなくいきなり、こう言った。

「こっちだ」

彼は迷わずぼくの手を取って、階段へ向けて強く引いた。

ぼくは、彼に続いた。

*

彼はそのまま、早足で階段を降り続けた。ぼくも、ためらうことなくついていった。どこのホームへ向かう階段かは、よく分からなかった。向こうから上がってくる人は何人もいたけれど、薄暗いのと急いでいるのもあって、顔はあまり見えなかった。ぼくはひたすら、男の顔だけを見て、階段を降りていった。蛍光灯の光が、流れるように後ろへと消えていった。階段は奇妙に静かだった。

「長い夢の話を知っているか？」

男は言った。ぼくは聞き返した。

「え？」

「あるところに男がいた。男は名家に生まれ、優しい両親の元ですくすくと育ち、素晴らしい教育を受け、名門校に入学し、父の家の跡を継ぎ、美しい妻をめとり、事業を成功させ、三人の子供を産み育て上げ、国中の人々から感謝され、尊敬され、愛され、やがて成功のうちに歳を取り、大勢の孫に囲まれて静かに幸せに息を引き取った、というところで目を覚ました。男は全てが夢であったことに気づき、不満のあまり大声で泣き出した」

「ハッピー・バースディ」

「そう。人生が始まるとき、人はすべからく泣いている。泣きたくなければ生まれなければよいということだ。だから人々は、この世界の可能性から眼を逸らしてきた」

男はほとんど走るような早足で先へと進んだ。手を離されないようにするので、ぼくは精一杯だった。いつの間にか、人とすれ違わなくなっていた。

「世界はまだ始まってすらいない。これまでの長く偉大にすら見えた歴史の全ては、優しく暖かな母の子宮の中でゆっくりと育まれていた心地よい胎動の時に過ぎないのだ。幸福と静寂の日々は終わりを告げる。悲しみに暮れる人々の涙と共に、全ては、これから、始まる」

ふと気づくと、ぼくらは階段でなく、平坦な道を進んでいた。

「君は、泣くのか？」

男は訊いた。ぼくは正直に、分からないと言った。

周囲は暗闇に包まれていた。光は何一つなく、けれど不思議なことに、ぼくは自分の姿も、男の姿も、はっきりと眼にすることが出来た。

ぼくは続けて言った。

「泣くべきだと思えば、ぼくは泣く」

「それが選択するということだ。望むものがあるのなら、君は可能性に手を伸ばすことが出来る。常に、必ず。しかし当然だが、可能性とは心地好いものではない。そこは不安と危険に満ちあふれている、いや、だからこそそれを可能性と呼ぶ。幼子が眼に映るものへ手を伸ばすのは何故だ？ 這い回るのを止めて自分の足で歩くようになるのは何故だ？ その方が危険だと分かっているのに？ 全ては前提から間違っている。危険だから手を伸ばすのだ。不安に向けて歩み出すのだ。君はただ、それを思い出せばいい」

気づくと、彼方に光が見えた。闇に切り込みが入れられたように、鋭く細い光が向こうから射してきている。あまりに眩しく、強い力を放っていて、ぼくは思わず眼に手をやった。

「必要なものは全て、未だ出逢ったこともない父と、君と一つだった母によって、すでに与えられている。あとは残された可能性へ向けて、君が歩み出すのみ」

そして男はぼくの肩を掴むと、光へ向けて押し出した。

「さあ。これが、君の望んだ世界だ」

＊

ぼくは、グランド・セントラル駅から外へと飛び出していた。

表口だった。空は晴れ上がり、青く広がり、ビル群は傲慢なほど静かに佇んでいた。ニューヨークの街路には、車が一台も見当たらなかった。人の姿も見えなかった。交通信号（トラフィック・ライト）は光を消し、街は途方もない静寂の中にあった。ぼくは何も言わず、ふらふらと歩き出し、何もない道に出て、ゆっくりと空を見上げた。

突然、青空を突き抜けて二機の戦闘機が向こうから飛んできた。

耳が痛くなるほどの低空を、彼らは破壊的な勢いでやって来た。ぼくは思わず両耳を塞ぐと、戦闘機の行方を見た。あっという間にぼくの頭上を飛び越えていったその二機の戦闘機は、そのままわずかに回転しながら駅舎の上を通り過ぎ、その向こうに建っている、尖塔型の美しい一本のビルの中腹に激突した。

ビルは爆発と共に砂塵を撒き散らして、地へ潜るように姿を消していった。

ぼくは振り返り、遠方の駅舎の中を見た。駅舎の中は、薄い緑色の光に包まれていた。天井から下がっているはずのアメリカ国旗は、ペンキをぶちまけたような奇怪なマーブル模様の旗に変わっていた。大勢いたはずの客も、ただの一人も見当たらなかった。駅舎の中央には、あの男がたった一人で立ち尽くしていた。ぼくは彼を見た。

男は髭を生やした口元から歯を見せて、実に楽しげに笑っていた。男の見せる、初めての笑顔だった。そうして男は口を開いた。ずいぶん距離が離れているはずなのに、ぼくにはいやにはっきりと、男の声が聞こえた。男はこう言った。

「ハッピー・バースディ」

そして男の声が聞こえたかと思うと同時に、グランド・セントラル駅は、背後のビル倒壊の余波を受けて唐突に、内側へ向け轟々と崩れていった。ぼくは道路の中央へと飛び退いた。男は崩れ落ちるがれきの中に飲まれ、たちまち姿が見えなくなった。最後に、男の不敵な笑みだけが、眼に焼き付くようにして残った。駅舎は消滅した。土煙が辺り一帯に広がった。ぼ

くは道路に座り込んで、その様を見つめていた。
　立ち上がるとぼくは砂を服から払い、それから、道の左右を見た。アスファルトのあちこちに、大きくヒビが入っていた。道に面した店のショウ・ウィンドウのガラスはどれも割れて、中のマネキンは、力なく倒れていた。ずっと遠くまで視線を移していくと、道の所々には、横転した戦車が転がっていた。いずれもすっかり錆び付いているようだった。ぼくは次に、視線を上へ向けた。あるビルの半ばには、大型のディスプレイがあった。ディスプレイにはバチバチと明滅しながら、どこかのニューススタジオの映像が映っているようだった。キャスターは、冷静な顔で何かを読み上げているように見えた。けれど音声はなく、何を言っているのかは全く分からなかった。
　よく見れば、周囲のビルも様子が変わっていた。煤け汚れて、崩れかけているような部分もあった。中にはツタが生えているものすらあった。壁に長いツタと草葉が這って、一面を覆っているものもある。ほとんどの窓が暗くなっていたけれど、時折、電気が点いているところもあった。ニューヨークは廃墟になっていた。ぼくは道を歩き出した。
　まっすぐ進んでいくと、遥か前方に、何故か大きな樹が見えた。その大きさはただごとではなかった。そこいらのビルよりもよほど大きく、まるで一つの山のようだった。樹はニューヨークの中央で、天に向かって高々と伸びている。脇のビルは押しのけられて、傾いでいるように見えた。大きな陰を地面に作りながら伸びやかに広がった枝についている、青々とした無数の葉の群が上空の風に悠々と揺れている様子が、ぼくの眼にはよく見えた。あとでそちらへ行ってみよう、と思った。
　天を再び見上げてみると、昼間だというのに月と星が出ていた。どれもはっきりと、その姿が見えた。微妙にぼくの知っている星の配置とは異なっているような気がした。それに、月が異様に大きく見えた。クレーターや海の一つ一つが肉眼で見えるほどに、地球に迫ってきていた。ぼくは若干の恐怖を感じた。月が遠く離れていたのは、怖れを感じさせないためだったのだと、ぼくはその時初めて知った。月は、醜い顔を見せつけているかのようだった。目を凝らしてみると、月の直径に沿ってまっすぐヒビが入り、そこから全体が、上下に少しだけずれているように見えた。

どこかでかたかた、という音が聞こえた。ぼくはそちらを向いた。見ると、小さな戦車が、ビルの合間の道の先へ向けてのんびりと走っていた。ぼくはそれを、じっと見つめる。

ふいに戦車は、がくんと前のめりに傾くと、道の途中で瞬間的に姿を消した。ぼくはそちらへ向けて、走り出した。

戦車が消えたところで、ぼくは脚を止めた。それは消えたのでなく、落ちたのだった。道路は途中で消滅して、そこから先は何もなかった。そこで街は、切り立った崖になっていた。ぼくは崩落したようになっている道路の端から顔を出し、崖下を見下ろした。

崖は、何千メートルも下まで延々と続いていた。ごつごつとした岩肌が露出して、霧か雲か分からない白いもやが漂っている。電気やガスの管が途中で切られて、半端な姿を見せている。下水道もそこで分断されてしまっているので、中から大量の水が、滝のように下へ向けてどうどうと流れ落ちていた。ぼくはずっと下を見つめた。

風が吹き、霧が晴れた瞬間、一番下にきれいな湖と森林がどこまでも広がっているのが見えた。その向こうまで見ると塔が幾本か建っていて、さらにその向こうに、海のようなものが見えた。海は光を照り返し、輝いていた。海は地平線まで広がっていた。

ぼくは崖の端に立った。両手を広げ、胸を開き、澄み切った空気を吸い込んだ。清純な瑞々しい力が、ぼくの身体を満たした。世界は美しかった。ぼくは泣かなかった。世界は可能性に満ちあふれていた。ぼくは生きるということと、これからするべきことを全て理解した。

崖の端から世界の果てを見つめて、ぼくは思った。

ビギニング・オブ・ザ・ワールド。

物語はここから始まる。

――了